

第6章　そこで出会ったものは



その家は、横浜郊外の新しい住宅地にあった。

横浜駅前から乗ってきたバスを降りると、そこは海に近い土地らしく、凍えるような風に潮の匂いがまじっていた。井上さんは真也の肩を抱くようにして、洋風の家々が建ちならぶ大通りを歩いていった。昼近い時間のせいかな、ほとんど人通りがなかった。

似たような家ばかりが列なっていて、手紙に記された所番地がどこなのか見当もつかなかった。ただ出かけていけばいいのだと気楽に考えていたが、ここで心細さを感じた。

「出張仕事っていうのも、意外にたいへんなものだな」

と、井上さんはつぶやいた。

自分がオフィスでデスクに向かっているあいだに、出張修理をしに出た職人たちは知らない街で、このような思いをしていたのか。

「あつ、リーリ、ここだよ。……ほら、あの表札を見て」

とつぜん真也が叫んだ。指さしている先に白い表札があった。大ぶりの陶板に横書きで

文字が青く浮きでている。夫婦の氏名が記してあった。

「おお、ここだ、ここだ。……真也くんが目ざとくて助かったよ」

表札の下にある呼び鈴を押すと、はい、と女の人の声が聞こえてきた。玄関に出てきた中年の奥さんが、修理依頼の手紙をくれた当人だった。

「すみませんね、こんな寒い日にきていただいて。せっかく直していただけるものなら、年の明ける前につて、わがままなことを言っちゃいまして、ねえ」

招じ入れながら、電話で聞いたとおりの声でしゃべりつづけた。

「あら、この坊ちゃん、お孫さんですか？ 今日学校はお休みなの？」

真也がとまどいを見せながらも、帽子を脱いでお辞儀をした。

井上さんは革バッグを上がりがまちに置きながら、代わりに答えた。

「ええ。……この子は、わたしの助手でしてね」

「ああら、それは頼もしいこと。さあさ、おあがりになつてください」

案内されたのは廊下の奥のリビングルームだった。十二畳ほどの室内には大型テレビがすえられている。反対側の壁際に四人がけの木製ベンチがあった。

「あれですね。……お買いあげいただいた長椅子」

言いながら近づいていき、使い込まれて渋い艶をたたえているベンチを見下ろした。

懐かしさをおぼえたが、同時に、せつない思いもこみあげてきた。

このベンチをデザインした当時は、井上木工所が一人前の企業として業界に認められた

ころだった。それだけに、斬新なデザインをつくりだそうと努めた。たくさんの設計図を破り捨て、いくつもの試作品をつくったり壊したりした。理想のカーブをつくりだすために、職人たちと一緒に三晩つづけて徹夜したこともあった。

バブル景気のさなかで大型マンションが続々と売りだされ、そのリビングに適した豪華な革張りのソファセットが人気を呼んでいた時代だった。

それをよそに、完成したベンチはすこぶる好評で、三年つづけて西急百貨店でのヒット商品となった。といつても、もともと大量生産ではないので、革張りのソファセットなどには及びもつかない数だった。

しかし、カントリー・ファニチャーの固い木製ベンチを愛好するお客も、ちゃんいるのだ、と井上さんは意を強くしたものだ。この家のご主人も、そのおひとりだったわけだな。こりゃ、なんとしても元通りに修理しなくちゃな。

——この家のご主人も、そのおひとりだったわけだな。こりゃ、なんとしても元通りに修理しなくちゃな。

井上さんは嬉しさを噛みしめながら、奥さんへうなずいて見せた。

「それじゃ拝見しますよ」

さっそくベンチの背を調べはじめた。送られてきた写真にあったとおり、背の支え板が外れかけて、三枚の横板を通した背全体が不安定な状態になっていた。

作業にとりかかる前に、ベンチを壁際から少し移動させなければならぬ。

「おい、真也くん、ちょっと手をかしてくれ」

入り口に立っていた真也が緊張した面持ちで近づいてきた。二人はベンチの座の部分に両手をかけ、いちにのさん、で腕に力を込めた。真也の顔が真っ赤になった。

「よしよし、このぐらいでいいだろう。バッグをここに持つてきてくれ」

部屋の隅に置いてある革バッグを、真也はひとりで運んできた。ますます顔が赤くなっている。井上さんは当然という表情で、さりげなくバッグを受けとった。

ドライバーを使ってバカになっているネジ釘を五本すべて外し、ひとまり太いネジ釘を取り付けた。つぎに補強のための三角形の板を、座と脚と背の三つの部分に行きわたるようにして、ベンチの三カ所にネジ釘で固定した。

そのすべては、写真を参考にして前もって準備してきたものだった。

「これでよし。……真也くん、ベンチに腰かけて、思いきり背にもたれてみてくれ」

真也が言われたとおりにしたが、背はびくともしなかった。井上さんも腰かけて二人でもたれてみて、さらに見守っていた奥さんも加わったが、やはり微動だにしなかった。

「すごいわ、買ってきたときと同じになっちゃった。きつと主人が大喜びしますわ」

奥さんが、いかにも感激したというように小さく拍手した。

「いま、お茶をいれてきますから、ここで召しあがってちようだいね」

奥さんがいそいそと部屋を出ていったあと、井上さんがドライバーを片づけていると、そばにしゃがみ込んだ真也が声をひそめて言った。

「びっくりしちゃった。……ドライバーひとつで直しちゃうんだもの」

「さいわい修理箇所が予測したとおりだったからな」

「電車とバスに乗ってきた時間のほうが、ずっと長かったね」

「そうだなあ。……でも、ちゃんと直すことができてよかったよ」

井上さんは苦笑しながら答えた。

「なにしろ、これが初仕事なんだな」

やがて茶菓が運ばれてきて、二人は人心地のついた思いだった。家を出てきてから、途中で缶ジュースも飲まず、まっすぐここへやってきたのだ。

「それで、修理代はいかほど？」

奥さんが、さりげなく聞いてきた。

「遠くまできていただいたんですもの、充分にお支払いしなきゃいけませんわね」

「はあ、それじゃあ。……材料費と工賃と交通費の実費ということで」

と、井上さんは口ごもりながら答えた。

「恐縮ですが、六千円、いただきます」

すると奥さんが、びつくりした表情で聞き返してきた。

「えっ、六千円ですか？」

「はあ。……先に見積もりをお出しすればよかったです、とにかく拝見した上です思ったもんで。もちろん助手の交通費は結構です。なんなら、おまけしますか？」

「とんでもないですわ。そんなにお安くて、よろしいんですか？」

「はあ。……いちおうアフターサービスですので」

「それじゃ六千円で。……でも、すみませんわねえ」

今度は、奥さんのほうが恐縮した口ぶりになった。

そのあと少し考えるようすだったが、まもなく身を乗りだすようにして言いだした。

「あの、もしよかったら、ついでにもうひとつ見ていただきたいんですけど」

「はい、いいですよ。なにを修理するんでしょう？」

「いえ、壊れているわけではないんです。……むしろ丈夫すぎて、ちょっと持て余しているぐらいなんです。じつは、主人の亡くなった父親が大切にしていたものでしてね」

そう話しながら、さっそく奥さんは先にたつて井上さんを二階へ案内した。

階段を昇ると、突き当たりに広い座敷があった。

奥に床のある十畳敷きだった。その中央に大きな座卓がすえてある。畳二枚分の面積は優にある。

入り口の敷居のところから見ていた井上さんは、ほう、と吐息をついた。

みごとなつくりだった。巨大なケヤキの幹から切りだした約六センチ厚の一枚板を天板にして、その四周を約五センチ幅の同材でかこい、きりりとした印象にまとめている。全体の表面は拭き漆をほどこしたただだから、木目が美しく浮き上がって見えた。

「ああ、……これは」

と、井上さんの口から短い言葉が洩れたした。

まるで恐ろしいものと出会ったような表情で、食い入るように座卓を見つめている。その目が異様にすくなくていた。

そばで真也が、そんな井上さんをびつくりしたように見上げている。

「立派なものですけど、これがとっても重たいんですよ」

と、奥さんが溜め息まじりに言った。

「ちよっと動かすにも、男性が二人がかりでやっとなんですよ」

それには答えないで、井上さんはまっすぐ座卓へ近づき、そばにしゃがみ込んだ。

しばらくあちこちを見まわしていたが、やがて振り返って奥さんを見上げた。

「先ほど、ご主人の父上が遺されたものだとおっしゃいましたね？」

「ええ。……とっても大切にしておりましたそうです」

「どこで、お求めになったか、ご存じですか？」

「いえ、わたしが嫁いでくる前のことなんです」

「ご主人は、ご存じじゃないですか？」

「さあ。なにしろ、ずいぶん、むかしのことですから。……でも、特注したものだとい

うことは聞いたおほえがありますけど」

「やはり、そうですか」

「この座卓に、なにかご不審でもありますの？」

「そうじゃありません。ただ、……これは、わたしの父親がこしらえたものでして」

「あらまあ、あなたのお父さまが？」

よほど驚いたらしく、そのまま奥さんは絶句した。

井上さんはうなずいてから、ゆつくり立ち上がった。

「三十五、六年前になりますが、わたしの父親がご注文を受けてつくりました。大きさは指定されたようで、長いあいだ適当なケヤキ材を探しておりました。たしか受注してから四年ほどたって、ようやく手に入れることができたのだったと思います」

話しているうちに、井上さんは遠くを眺める目になっていた。

「それから乾燥させるのに一年ほどかけました。さらに製作するのに半年以上もかかりましたつけ。……父は、じつに頑固な人でしてね、自分の気が乗らないと仕事をしないという困った癖がありましたから」

井上さんの目には、ひとりの老人の瘦せた後ろ姿が映っていた。いかにも偏屈そうな背中が、まわりに置いてある道具類や木材などと溶け合っているように見えた。

「たしかに、おほえてますよ。……この座卓は、おやじにとつては一世一代の傑作だったものです。父親自身が自慢そうに、そう言っていましたからね」

話しながら、当時のことを思い浮かべていた。

——おやじのもとから離れたいと思いはじめたのも、このころだった。

だいぶ前から、それまでにない新しい木工家具をつくりたいと願っていて、なんとか父

親に訴えた。しかし父親は、はなから相手にしてくれなかった。

「おまえの腕じゃまだ早えた」

いつも同じ言葉が返ってきた。十六歳から三十歳すぎまで、十五年以上もかけて磨いてきたつもりの技量を、たった一言で否定されてしまった。

——ほかの弟子たちよりずっと腕がいいと自負していたのに、まだ早い、と真つ向から切り捨てられたんだからな。若かったわたしには、だいぶこたえたよ。

井上さんは、当時を思いだしながら苦笑していた。

その表情を見つめていた真也が、おずおずと話しかけてきた。

「ねえ、リリーのお父さんって、ぼくのひいお祖父さん？」

「そうだよ、とつくに亡くなったがね」

「そのひいお祖父さんが、このテーブルをつくったの？」

「テーブルじゃなくて、座卓っていうものだ。……ちよつと前までは、どこの家にもあって、こういう座卓でご飯を食べたり、お客さんとお茶を飲んだりしたもんなんだよ」

「へええ。……ひいお祖父さんのつくった座卓かあ」

「もつとも、これは特製で、こんな大きなものは、めつたになかったんだけだな」
ようやく我に返って、井上さんはいつものように微笑んだ。

「ところで、奥さん、この座卓をどうなさりたいんですか？ とくに修理しなきゃならないところは見あたりませんが」

「ほんとに不思議な縁ですわねえ」

奥さんは、まだ驚きを隠せないようすで、これまでになく口ごもった。

「お父さまが自慢なさってたと同って、なんか言いだしにくくなっただけ。……じつは、できることなら寸を詰めていただけないかと」

「この座卓を小さくならしたいの？」

「ええ。……義父の家には二十畳もの大座敷がありましてね、それに合わせて注文したのでしょけど、ここじゃ釣り合いませんもの」

と、奥さんは困り果てたという表情を見せた。

「主人が、だいいじな形見だつて言いましたね。……この家を建てたとき、外壁をつくる前に、無理やり運び込んだんですよ。ですから、もう出し入れは自由になりませんの」

「なるほど。……どのようにしてここに運び入れたのかな、と考えてたんですよ」

「いまじゃ主人も後悔してて、なんとかならんのかつて言ってますの。……おかげで、この座敷は、お正月に会社の部下の方々がお年始にみえるときしか使ってませんのよ」

「座卓に乗っ取られたようなもんですな」

と、井上さんは苦笑した。

「しかし、寸を詰めるのも簡単にはできないんですよ。これだけの一枚板を切ったり削ったりするには、それなりの場所と道具が必要なんです。……それに、お父上が注文されたものの価値が、ぐっと下がってしまうことにもなります」

井上さんは、生前の父親の厳めしい顔を目に浮かべていた。

——もしも、あの世で聞いてたら、あの洪い顔がもつと洪くなってるだろう。

父親が生きているときは、日本の住まいがこれほど変化するとは思ひもしなかったはずだ。畳のある大きな座敷はなくなり、広かった空間を小さく仕切って家族のための個室がつくられた。それぞれの部屋には襖や障子ではなく、ドアがはめ込まれた。

——おやじさん。日本人がプライバシーとやらを重んじるようになってから、和家具の居場所がなくなってるんだよ。この家には、ちゃんとした座敷があるから、まだいいほうだけどね。ところが困ったことに、この座敷でさえ、おやじさんご自慢の座卓を受け入れられなくなってるようだ。

井上さんは無念でならなかった。

もしも井上木工所が倒産していなかったら、おそらく即座に交渉して、この座卓を引き取らせてもらっただろう。四本の脚を、じっくり時間をかけて外しさえすれば、天板を斜めにして窓から吊り下げることができるかもしれない。

搬出に苦勞する価値は充分にある。それほど、この座卓は優れたできればえなのだ。しかし、いまの井上さんには残念ながら不可能なことだ。

「これほどの座卓をつくれる職人は、もうどこにもいないでしょうな」

と、井上さんは尊敬の気持ちを込めて言った。

「これほどの座卓を注文なさる方も、いまじゃめったにいらっしやらないでしょう。と

ところで、ご主人のお父上はどういう方だったんです?」

「むかしは会社を経営しておりましたそうですけど、わたしが嫁いでまいりましたときには一線から引退して会長という肩書で、悠々自適の毎日をすごしてました。……若いころから、たいへんな趣味人で、麻布にあった家には、お茶室なんかもございましてね」
奥さんは懐かしそうに言いだしたが、まもなく沈んだ口調になった。

「でも、義父が引退したあと四、五年で会社が傾きましてね、競争していた会社に吸収されて、晩年はたいへんでした。……亡くなったあと、借財の返済や相続税なんかに持っていかれて、お恥ずかしいけど、この座卓がただ一つの形見なんですのよ」

それきり口をつぐんで、亡き人を思いだしているのか、じつと座卓を見つめている。

——どの家族にも、それぞれに奥深い記憶というものがある、と井上さんは思った。それをつなぎ留めているのは、この家の場合、遺された座卓なのかもしれない。

「それではなおのこと、このままにしておかれたほうがいいですよ。ご主人にとつても、あなたにとつても、かけがえのない形見なんですから」

「そうですわね。……よかったわ、ご相談してみて」

奥さんは納得したように、しつかりとうなずいた。

井上さんは、ほっとして微笑んだ。

「わたしのほうこそ見せていただいて、ほんとによかったです。……なあ、真也くんも、ひいお祖父さんのつくったものを初めて見ることができて、よかったな」

「……うん」

真也は口を一文字にしてうなずいたが、なにか聞きたそうな表情だった。

帰りの電車は、まだラッシュアワーにはだいたい間があるせいか、だいたい空いていた。

二人は座席にならんで腰かけた。井上さんは革製バッグを抱くようにして膝の上に置いた。車内は暖房がきいていて、厳しい寒さに縮こまっていた身体が、ゆるやかに解けていくような気がした。こわばっていた頬もゆるんでいる。

——これで六千円とは、やっぱり安かったかな。

井上さんは、ひそかにそう思った。

——しかし、おかげでおやじのつくった座卓に出合うことができた。そのうえ、あのままの姿で使いつづけてもらえそうだ。

胸の奥から、静かに満足感がわき上がってきた。

まったく思いがけないことだった。父親のつくった座卓に、これほどの愛着をおぼえるとは考えてもみなかった。そのうえ優れた仕事への敬意さえ抱いている。

——長いこと、おやじの木工家具に反発してきたのに、どういうことなんだ？

井上さんは自問しながら、うつむいて固く目をつむった。そうすると、目の底に写り込んでいる父親の渋い顔や座卓のたたずまいから逃れられるような気がした。いまは、満足感だけで充分だ。それ以上のことは敬遠したい気分だった。

「ねえ、リーリ」

と、真也の遠慮がちな声がした。

「ちよつといいかな、教えてもらいたいんだけど」

井上さんは、おもむろに目をひらいた。

かたわらを見返ると、真也が思いつめたような瞳で見つめてきた。

「なんだね？」

「あのさ、……ひいお祖父さんも家具をつくる人だったんだよね」

「そうだよ、家具職人だった」

「リーリの会社にいたの？」

「いや、自分の工房を持っていた。リーリが会社をつくる、ずっと前にね」

「へええ、東京で？」

「長野県の諏訪市だよ。……諏訪湖っていう湖のそばでね」

井上さんは、自分の育った土地を思い浮かべた。

「リーリが子どものころは、冬は湖でワカサギ釣りをしたもんだ。近くには賑やかな温泉街もあった、ほうほうから大勢の人がやってくる。……そう言えば、真也くんがママが生まれたのは諏訪だったな。もつとも小さなときに引越してきちゃったから、ほとんどおぼえてはいないだろうがね」

井上さん夫妻が諏訪を離れたのは、たしか洋子が八歳のときだった。

「それじゃ、ひいお祖母さんは？」

真也の質問が苦い思い出をさえぎった。

井上さんは救われた気がして、また真也を見返った。

「リーリが中学一年生のときに亡くなったんだよ。だから、エーバもママも知らない」

「ふうん、そんな前に死んじゃったのかあ」

「残念ながらね。……優しい母親だったんだけど」

「可哀そうだったね、リーリ」

「……ありがとう」

思いがけず孫に慰められて、井上さんは当惑しながら答えた。

すると、ふいに胸が熱くなった。なぜか、たとえようもない安らぎをおぼえたのだ。

——もしも、おふくろが生きてたら、まったくちがう人生を歩んでいたかもしれない。少なくとも、あんなに早くにおやじの工房に入ることはなかっただろう。

母親が死んだあと、あらゆることが父親の命ずるままになった。中学校を卒業する前から工房で働きたったのも、少しでも早く仕事を手伝わせ、木作業をおぼえさせようという父親の考えからだった。

中学校を出たら高校へ進学するつもりでいた井上さんに向かって、

「職人は技術をおぼえりゃいいだ。よけいな学問など必要ねえ」

と、父親は当然だというように言った。

「おれなんか小学校きりで、中学にも行かなかったでな」

母親が生きていたら、けつして父親の言うとおりににはならなかっただろう。

——いまとなつちや、どつちがよかったとも言えないけどな。おやじのおかげで木工の世界に入れたんだし、倒産したとはいえ自分の会社まで持てたんだから。

そう思うことで、井上さんは苦しい思い出を振り払おうとした。

真也が身体を寄せかけてきていた。ずっしりした重みを感じた。そつと見やると、井上さんの腕に頬を押しつけるようにして眠っていた。

——いろいろあったから、疲れたんだよな。ごくろうさん。

井上さんは微笑んで、自分も目をつむった。

——くるとき、電車に乗るのはひさしぶりだって真也くんは言ったけれど、じつはわたしもそうなんだ。なにしろ、十年以上もクルマで送り迎えしてもらってたからな。

いまでも鮮やかに記憶している母親の顔が、あのころのように優しく話しかけながら近づいてきた。しかし、まもなく押し寄せてきた眠気のせいで、たちまちおぼろげとなり、やがてかき消されてしまった。

ひとりごと 胸にしまった秘密

電車が横浜を出てから、ずっと眠ってしまったみたいだ。

東京駅で乗り換えるとき、リーリが恥ずかしそくに笑った。

「二人とも、ぐっすり眠ったなあ。……まだ眠気がさめてないよ」
その言葉どおり、山手線に乗って座席に腰かけると、すぐにリーリは眠ってしまった。仕方ないよね、初めての出張で緊張しちゃったんだろうから。

ぼくは眠たいのをがまんして、しっかりと目をひらいてた。うっかり乗り過ぎてしまったら、たいへんだもの。それに、疲れて眠ってるリーリを見守ってあげなきゃいけない。それも、助手の仕事のひとつなんだよ。

ひいお祖父さんのつくった座卓って、すごく立派だった。

そこらにあるテーブルや机なんかとは、ぜんぜんちがうってことが、ぼくにだってわかったよ。なんていうか、そこに置いてあるだけで、部屋の中の空気がきれいになっちゃうみたいね、そんな感じだった。ひいお祖父さんのたましいっていうか、こ

ころがこもってるのかもしれないって、ぼくは思った。

初めて行った家に、ひいお祖父さんの座卓があるなんて。ほんと、びっくりしたよ。でも、いちばん驚いてたのは、リーリだったみたいだ。あの座卓を見たときの顔したらなかったね。ぼくなんか、リーリの目を見て恐くなったぐらいなんだから。

ひいお祖父さんのこと、もっともつと聞きたかったんだけど、なんだかリーリは話したくないみたい。だから、しつこく聞くのはやめたんだ。

だって、あんまり話したくないってこと、だれにでもあるだろう。

ひいお祖母さんのことだって、もしかしたら話したくなかったのかもしれない。あんな悲しそうなリーリの顔って、あんまり見たことがなかったもん。

中学一年生になって、もしママが死んでしまったりしたら、ぼくは悲しくて淋しくて、きつと泣きながら死んでしまっただろう。

ぼくらの住んでる町に帰り着いて、私鉄電車を降りるとすぐに、

「いへるうさんだったね、真也くん」

と、リーリはあらたまった感じで言った。

「いい助手がいてくれたおかげで、初めての出張をぶじに終えることができたよ」

「ぼく、楽しかったよ。……ねえ、リーリ、また連れてってよね」

「ああ、いいとも。真也くんが行きたいときは、きつと誘うことにするわ」
駅前広場へ出てから、いつのまにか、ぼくは急ぎ足になっていた。

——チビを散歩に連れてかなきゃ。

いつも学校から帰ってくるとき、かならずそう思ってたんだ。

でも、すぐ気がついた。ああ、チビは、もういなくなっちゃったんだって。